

使用済み核燃料搬入スケジュールが公表されました

「核の中間貯蔵施設はいらない！下北の会」がむつ市へ申し入れ

3月27日にリサイクル燃料貯蔵(株)と親会社の東京電力が青森県やむつ市を訪れ、使用済み核燃料装填キャスク1基を使用前検査のために本年7～9月中に搬入することを表明しました。

このことを受けて「核の中間貯蔵施設はいらない！下北の会(野坂庸子代表)」はむつ市役所を訪れ、申し入れ書を手交(野坂代表が急遽、都合により欠席したため栗橋事務局長が代行)しながらおよそ1時間にわたり、申し入れ内容などについて話し合いを持ちました。

むつ市側は角本政策推進部長、畑山防災危機管理監(むつ消防署長兼務)らが対応しました。

私たちはまず、搬入の前提となる安全協定締結に先立ち、きめ細やかな住民説明会の実施を市当局に求めました。およそ20年前の施設建設に向けて県内各地で行われた住民説明会開催時と現在では様々な

面で大きな隔たりがあります。3・11事故を踏まえ、原子力災害に対する住民の意識も大きく変化しています。また、何より最長50年貯蔵後の搬出先として当時の説明会で提起されていた第2再処理工場計画は経産省などを含むあらゆる国家機関のどこにもその計画すら存在しません。市当局は現時点では規模や開催方法などは決まっていないが申し入れ内容については検討するとしています。

また、安全協定には最低でも①保管期限終了後の使用済み核燃料装填キャスクの搬出先の明確にすること、②国が核燃料サイクル事業または使用済み核燃料の全量再処理方針を中止した場合は施設自体の存在意義がなくなるため返上すること、主にこの2点は確実に協定に盛り込むことを強く訴えました。

なお正式な文書回答は5月中に発出することを確認しました。

【申入書の概要】

- ① 再処理工場の操業が未確定であるため、最低でも操業メドが立つまで搬入を認めるべきではない。
- ② わが国が使用済み核燃料の全量再処理路線放棄時の貯蔵事業の継続についての見解。
- ③ 安全協定締結前の住民説明会について開催主体や日程、規模について伺いたい。
- ④ 安全協定締結当事者には電事連や親会社も関与するか。今日までのリサイクル燃料貯蔵貯蔵(株)の対応を見れば当事者能力の欠如を感じるため、ぜひ協定当事者として親会社も加わることが必要と考える。
- ⑤ 安全協定の具体的な内容には貯蔵期間満了後の搬出先を明文化することを強く求める。
- ⑥ 立地協定当事者以外の事業者からの搬入を絶対認めない立場を明言してほしい。
- ⑦ 能登半島地震を踏まえ、中間貯蔵施設の活断層調査の再検討を市としても事業者へ申入れてほしい。
- ⑧ 自然災害と原子力災害が同時発生した場合、地形的な孤立状態に対する対処計画を知りたい。
- ⑨ オフサイトセンターの設置場所が具体化したようだが建設スケジュールは不明であり、この施設完成に先んじて中間貯蔵の稼働は認めるべきではない。搬入はについての見解を求めている。
- ⑩ 全国に例を見ない軍事施設と商業用原子力施設の併存は市民の命と暮らしを守る自治体としてどのような独自対策を考えているのか。
- ⑪ 本施設が稼働することによって新たに生じる経済的メリットについての見解を求める。



申し入れ書提出する
栗橋伸夫事務局長(右)
25日、むつ市

同日は、栗橋伸夫事務局長らが市役所を訪れ、市政推進部の角本力部長に申し入れ書を提出。その後の懇談で栗橋事務局長は、住民説明会を市内で複数回開くよう求め、角本部長は青森県が主導して決めることとした上で、「そのような形になるように話していきたい」と述べた。(佐藤航)

むつ中間貯蔵巡り
市民団体が申し入れ
住民説明会の在り方問う
リサイクル燃料貯蔵(RFS)が7～9月の事業開始を目指す、むつ市の使用済み核燃料中間貯蔵施設を巡り、同市の市民団体「核の中間貯蔵施設はいらない！下北の会」(野坂庸子代表)は25日、市に対し、搬出先が具体的に決まってい

4・9反核燃全国集会に500人！青森市民会館で開催！ 核燃サイクル計画受け入れから39年

1985年4月9日に当時の北村青森県知事が県民の声を視して青森県議会全員協議会で当時の核燃サイクル3点セット(使用済み核燃料再処理工場、ウラン濃縮工場、低レベル放射性廃棄物埋蔵施設)の受け入れを表明しました。以降、青森県反核実行委員会が結成され、この日を「反核燃の日」と定めて例年、この前後に全国集会が開催されてきました。

本年は39回目の「反核燃の日」として4月6日、青森市民会館に県内外から500名の参加のもとで開催されました。当時の3点セットはその後、MOX燃料加工工場、高レベル放射性廃棄物一時貯蔵施設と5点セットとなり、今日に至っています。

集会では原子力資料情報室の松久保肇事務局長から「能登半島地震からの教訓」が提起され、核燃サイクル阻止1万人訴訟原告団の浅石紘爾代表、下北か

らは栗橋が現況報告などを行い、終了後、青森市内をデモ行進、核燃サイクル中止を訴えました。

また、本集会に先立ち同会場で全国からの市民グループによる「4・9反核燃全国市民集会」が開催され、60名が参加、今村修青森県反核実行委員長（社民党青森県連代表）より「サイクル40年を振り返る」と題した講演が開催されました。こちらの集会でも栗橋が現況報告を行いました。その後、すべての参加者が午後からの全国集会に合流しました。

翌7日には六ヶ所再処理工場前で抗議集会が開催され、約100名が参加、核燃サイクル阻止1万人訴訟原告団山田清彦事務局長からの報告や六ヶ所村「花とハーブの里」代表の菊川慶子さん、「六ヶ所村の新しい風」共同代表の遠藤順子さんらのあいさつなどを受け、村内中心部をデモ行進しました。

「反核燃の日」集会
県内施設撤去訴え

青森

県内外の反核燃市民団体が6日、青森市のリンクス・ティンションホール青森で「第39回4・9反核燃の日全国集会」を開いた。約500人（主催者発表）が参加し、県内の原子力関連施設の撤去などを訴えた。

県反核実行委員会の今村修委員長はあいさつで「建設に着手してから30年経過しても完成しない再処理工場（六ヶ所村）が動くのか。動くとうそぶく国や県の姿勢を許すことはできない」と非難。7・9月の事業開始を予定する使用済み核燃料中間貯蔵施設（むつ市）について、地元団体が「ひとたび搬入が始まれば中間とは名ばかりの最終貯蔵施設へ変貌することを懸念している」と訴えた。

「原子力関連施設や核のごみの早期撤去を求める」とのアピール文を決議後、参加者は「脱原発社会を目指すぞう」などとシュプレヒ



コールを上げ市中心部をデモ行進した。
7日は六ヶ所村の再処理工場前で抗議活動を行う。
(野村遥)

4/7 東奥日報



えいっ〜！こんなあたりまえの意見書も否決するむつ市議会って

能登半島地震復旧・復興の最優先を求める意見書 自民党派閥裏金の徹底解明と再発防止策を求める意見書

いずれも否決されました

むつ市議会の第259回定例会は3月15日閉会しましたが、杉浦弘樹議員が中心となり、わが国の喫緊の課題として立憲民主党本部の方針を踏まえて地方自治法99条に基づき、下記の2項目の意見書を提出しました。

- ① 令和6年能登半島地震の復旧・復興を最優先することを求める意見書
- ② 自民党派閥裏金問題の徹底解明と実効性ある再発防止策の確立を求める意見書

しかし、この意見書は「自民クラブ」「公明・自由」「陸奥未来」会派などの反対により僅差でしたが採択に至りませんでした。こうした思想信条を超

えた国民全体が今一番の関心事から目を背けるむつ市議会与党会派の姿勢は一体何なののでしょうか。そんなことが感じられた3月議会でした。



○は賛成、●は反対、「欠」は欠席または採決時に不在。議長(富岡幸夫)は採決に加わらない

議案番号等	議決結果	合 計			市誠クラブ				公明・自由			自民クラブ				陸奥未来				会派に属しない議員						
		賛成	反対	欠席・不在	佐賀英生	東健而	野中貴健	大瀧次男	佐藤広政	住吉年広	櫻田秀夫	白井二郎	中村正志	佐々木肇	浅利竹二郎	井田茂樹	富岡幸夫	佐々木隆徳	岡崎健吾	村中浩明	富岡直哉	高橋征志	杉浦弘樹	佐藤武	工藤祥子	濱田栄子
能登半島地震復旧 意見書	否決	9	12	0	○	○	○	○	○	●	●	●	●	●	●	●	—	●	●	●	●	○	○	○	○	●
自民党派金徹底解明 意見書	否決	10	11	0	○	○	○	○	○	●	●	●	●	●	●	●	—	●	●	●	●	○	○	○	○	○

※ 「むつ市議会だよりNo.29」より

第95回メーデーむつ地区祭典が開催されました

連休初日にあたる4月27日(土)、全国で連合系のメーデーが開催され、連合青森下北地域協議会も同日11時よりむつ市来さまい館イベント広場に100名の労組員が参加し、開催されました。規模で、青森県内で一番小さな地協ですが、今年は、若い参加者が多く盛り上がったメーデーとなりました。集会

後はコロナ禍で中断していたデモ行進も行われ、終了後はむつニューグリーンホテルに会場を移して盛大に交流会も開催されました。本集会には杉浦市議、升田世喜男立憲民主党青森1区総支部長らが来賓として参加、自民党金権腐敗政治の打破などを強く訴えました。



**8時間は労働に、8時間は休息に、
そしてあとの8時間は自由な時間のために**
連合は、5月1日を祝日にするよう求めています。

東通原発、再稼働はますます遠のきました 6 回目の安全対策工事完了時期の延期

東北電力は4月 22 日、東通村の東通原発 1 号機を再稼働させる前提となる安全対策工事について、2024 年度中の完了を断念したと発表しました。今後、追加の津波対策が必要になることが大きな要因としています。「現時点で明確なスケジュールを想定することが困難」と述べ、再稼働は全く見越せな

い状況となっています。2005 年に運転開始した 1 号機を巡り、原発事故後に定めた新規制基準への適合性審査が長期化しており安全対策工事の完了時期をたびたび繰り延べ、6 回目の延期となりました。東通村長はこの報告を聞き「そんなことが今、判明したとは信じがたい」と事業者に苦言を呈しました。



2024年度完工の延期が決まった東北電力東通原発

同原発の新規制基準の適合性審査では2月、敷地に到達する津波を最大で海拔12・1メートルとする基準津波

東通原発 新工程示せず

対策不可避、再稼働遠のく

「100万年に1度の津波」壁に

東通原発（東通村）の安全対策工事完了時期を巡り、22日に異例の延期表明に至った東北電力。通例だった新工程を提示できない要因に挙げたのが、1千万年に1回程度を想定する発生頻度の低いものの規模が大きい津波への対応だ。敷地高を超える津波に対する追加工事は避けられない見通しで、再稼働はさらに遠のいた。

【1面に本記】

（想定される最大規模の津波）を予見。敷地高の13メートルを下回った。ただ、1千万年に1回程度の大津波は敷地高を上回るといふ。

具体的対策は防潮堤や、建屋などへの浸水を防ぐ水密化、建屋周辺への防護壁の設置が想定される。既に高さ3メートルの防潮堤があるが、新基準施行前の2013年に完成しており、効

果を見込むには改めて原子力規制委員会の審査を受けなければならない。対策について東北電力は「さまざまな選択肢から何が最善か検討する」と説明するが、いずれも単位の工期が見込まれ、再稼働への影響は必至だ。

東北電力は、1年半の準備期間を経て25年9月末ごろに新たな目標時期を提示する意向。その後は本体審査、詳細設計の認可（設工認）、それらの内容を反映した安全対策工事といった手続きが控える。

東通原発の審査を巡る主な動向

2011年3月	東日本大震災
14年6月	原子力規制委員会に適合性審査を申請
24年2月	敷地に到達する津波を最大で海拔12・1メートルとする基準津波（想定される最大規模の津波）を規制委がおおむね了承
3月	最大加速度を700ガルに引き上げた基準地震動（耐震設計の目安となる地震の揺れ）を規制委がおおむね了承
4月	24年度を目指していた安全対策工事完了の延期を表明
25年9月末ごろ	新たな工事完了目標を公表
	原子炉など本体の審査
	設工認審査
	安全対策工事
	再稼働？

「アウストラロピテクスよりさかのぼるのか」

青森県の宮下宗一郎知事は22日、東北電力東通原発（東通村）が原子力規制委員会の審査で、1千万年に1回程度の津波を考慮する必要性に迫られていることについて、審査基準に疑問を投げかけた。長大な人類史を引き合いに「事業者が一人で負わなければならないのか」と指摘した。

東北電力が同原発の安全対策工事の完了時期を延期すると報告後、県庁で報道陣の取材

宮下知事、津波評価に疑問

に答えた。宮下知事は「（原人より前の）アウストラロピテクスが約320万年前に登場し、人類の起源になったとされる。それよりさかのぼることが、現実世界で受け止めなければならない評価なのか」と述べた。

国土交通省の官僚時代に災害リスクの評価を経験してきたといい、「1千万分の1という評価は聞いたことがない」と説明。規制当局への批

「一方、村役場で東北電力から延期報告を受けた畑中稔朗村長も当惑を隠せない様子。審査の中間点としてあるはずなのに、なぜ今言うのか」と今回の津波評価に対する唐突感を吐露し、同社に改めて説明を求める考えを示した。

（取材班）

搬出先の明確化へ向け 安全協定に明記を！

宮下知事はむつ市長時代の2021年9月の経産省資源エネルギー庁が「第6次エネルギー基本計画」のパブリックコメントに自治体としては異例ながら応募しています。

貯蔵後の搬出先が明確でないことを懸念したためです。このままでは議会や市民に説明が困難であるため国として再処理工場のあり方を明確にしてほしいというものです。

そのことは市長自身が搬出先に不安を持っていることの証です。

だとするならば、当然、この点について安全協定などで明文化すべきではないでしょうか。



↓4/6 デーリー東北

期限内搬出国に確認へ

事業者にも
覚書締結視野

4/2 デーリー東北

青森県の宮下宗一郎知事は1日の定例会見で、リサイクル燃料貯蔵（RFS）が2024年7～9月の事業開始を目指すむつ市の使用済み核燃料中間貯蔵施設を巡り、最長50年間とする期限内の搬出について国や事業者の確認を求める考えを明らかにした。核燃料サイクル協議会の開催、覚書締結による確認も視野に入

は保管後は「搬出時に稼働している再処理工場」に運び出すとしているが、具体的には決まっていない。宮下知事は搬出することの確認について「（事業者や国から）住民に直接説明してもらったことは一つの担保になる」と述べ、事業者との安全協定締結に向けた県民説明会の場を活用する考えを示した。

一方、宮下知事は、国や事業者が搬出先の確定を求めるかどうかについては「安全協定締結の時期については『事務レベルでの協議が整っていない』と述べ、未定とした。



使用済み核燃料中間貯蔵施設からの期限内搬出について、国や事業者の確認する方針を示す宮下宗一郎知事1日、青森県庁

（岩淵修平）

路線利用者半数下回る

JR大湊線の沿線3市町

活性化協、住民アンケート

下北・上北地域の10首長で構成するJR大湊線活性化協議会（会長・山本知也むつ市長）は5日、むつ市内で開いた総会で、昨年度実施した周辺住民への利用アンケートの結果を一部公表した。沿線の同市（旧むつ市エリア）、野辺地町、横浜町で路線を利用する人は、3市町全てで回答者の半数を下回った。本年度は乗降調査を行い、これまでの調査やJR東日本の公表データも踏まえ、利用促進策や利用目標を検討する方針。

アンケートは昨年12月、今年1月、10市町村の住民を対象に実施した。沿線は3900人中1501人、

周辺自治体は3千人中1016人が回答。今回は沿線の結果のみ公表し、それ以外は現在分析中だという。

路線利用の有無は、むつ市が553人中257人が利用。野辺地町は472人中50人、横浜町は476人中197人とどまった。利用目的では、むつ市は食事や出張、横浜町は通院が多かった。

本年度は、7～9月に調査員が車両に乗り込み、乗降時間帯や目的などの利用者の詳細を調査。ダイヤ改正や2次交通の接続検討に生かし、路線を核とした地域活性化に取り組む考え。

（佐藤航）

JR大湊線は通学、通勤、通院、買い物などの地域経済及び生活環境を支える公共交通機関です。しかしながら、ダイヤ構成が不都合、特に青森市方面への往復は待ち時間が長く利用しづらいことや、主要駅とのバス路線との接続が希薄であること。強風に弱く運行不能事態が多いことなどを耳にします。

不便で利用を敬遠する、そして、ますます利用者は減少する。自治体が主導権を発揮してこうしたことへの改善への努力が必要ではないでしょうか。



自民全敗、立憲民主3戦全勝 島根1区で自民敗れる 衆院補選

衆院の三つの補欠選挙が4月28日、投開票されました。自民党は与野党一騎打ちとなった島根1区で敗れたほか、候補者の擁立を見送り不戦敗となった東京15区、長崎3区と合わせ全敗でした。派閥の裏金事件を受けて「政治とカネ」の問題への姿勢が問われた岸田首相には厳しい結果となり、今後の政権運営への影響が避けられない状況となりました。

3選挙区は、今回の補選まではいずれも自民議員が議席を維持していました。今回、自民党が唯一候補者を擁立した島根1区は、立憲民主党の党県連代表で前職の亀井亜紀子氏が自民新顔で元財務官僚の錦織功政氏を破りました。組織的な裏金作りをしてきた安倍派の元会長・細田前衆院議長の死去に伴う選挙で、実態解明への姿勢が問われた結果と言えます。

自民党は、劣勢が伝えられると首相が2度の応援に入るなど、党を挙げての選挙戦を展開し支持団体の組織票固めに力を入れましたが、裏金事件に加え、細田氏の「世界平和統一家庭連合（旧統一教会）」との深い関係が指摘されたこともあり大差の結果となりました。島根県はかつての中選挙区

制時代も含めて、自民勢力が当選を重ねる「保守王国」でしたが、その一角が崩れました。

東京15区は公職選挙法違反の罪で有罪となった柿沢前法務副大臣の辞職に伴う選挙。立憲や維新や小池都知事が率いる「都民ファーストの会」支援候補など9候補の混戦でしたが、立憲が擁立した酒井菜摘氏が、維新新顔の金沢結衣氏（国民民主党支持）などを破り、初当選しました。

谷川弥一前衆院議員の裏金事件を受けた辞職による長崎3区では、立憲と維新の野党同士の一騎打ちとなりました。前回衆院選で谷川氏に惜敗し、比例復活で現職だった立憲の山田勝彦氏が、維新との争いを制しました。

今回の選挙結果は次の闘いへ大きな弾みとなりましたが、勝因は何と云っても『自民の驕り・相手側の失策』が紛れもない大きな要因、立憲民主の実力とは言い難いことも事実です。

いずれにしても、純粋野党との選挙協力が大きなポイントだったことも確かです。立憲本部も今後の総選挙へ向けてキチンとこのことを認識して選挙戦略を構築すべきではないでしょうか。

衆院補選最終結果

▷東京15区補選

当	49,476	酒井 菜摘	立新
	29,669	須藤 元気	無新
	28,461	金沢 結衣	維新
	24,264	飯山 陽	諸新
	19,655	乙武 洋匡	無新
	8,639	吉川 里奈	参新
	8,061	秋元 司	無元
	1,410	福永 活也	諸新
	1,110	根本 良輔	諸新

(選管最終)

さかい なつみ
酒井 菜摘 37
立新①
看護師、助産師（区議）江東区、助産師学校

▷島根1区補選

当	82,691	亀井亜紀子	立元
	57,897	錦織 功政	自新

(選管最終)

かめい あきこ
亀井亜紀子 58
立元②
党県代表（議員秘書、参①）津和野町、カナダ・カールトン大

▷長崎3区補選

当	53,381	山田 勝彦	立前
	24,709	井上翔一朗	維新

(選管最終)

やまだ かつひこ
山田 勝彦 44
立前②＝社推
党県副代表（政調会長補佐、衆院議員秘書）大村市、法大

社民フォーラム青森・第3回政治学習会 辻元清美参議院議員講演会

《と き》2024年7月7日（日）13：00

《ところ》青森県労働福祉会館4階ホール

※ 政治日程（総選挙等）などにより変更または延期となる場合もあります。確定した段階であらためてお知らせしますが、多くの皆様のご参加をお願いします。参加希望者は栗橋までご一報ください。



★ 中間貯蔵操業反対のネット署名をお願いします



むつ中間貯蔵施設への使用済み核燃料搬入を許さないために
使用済み核燃料搬入反対現地集会
2024年**5月19日**（日）午後1時
於：むつ来さまい館イベントホール

★ 資金カンパも募っています【振込先】 ゆうちよ銀行 普通預金 店名：八四八 口座番号：0830170
名義：核の「中間貯蔵施設」はいらない！下北の会

むつ市のスマートシティ構想って？

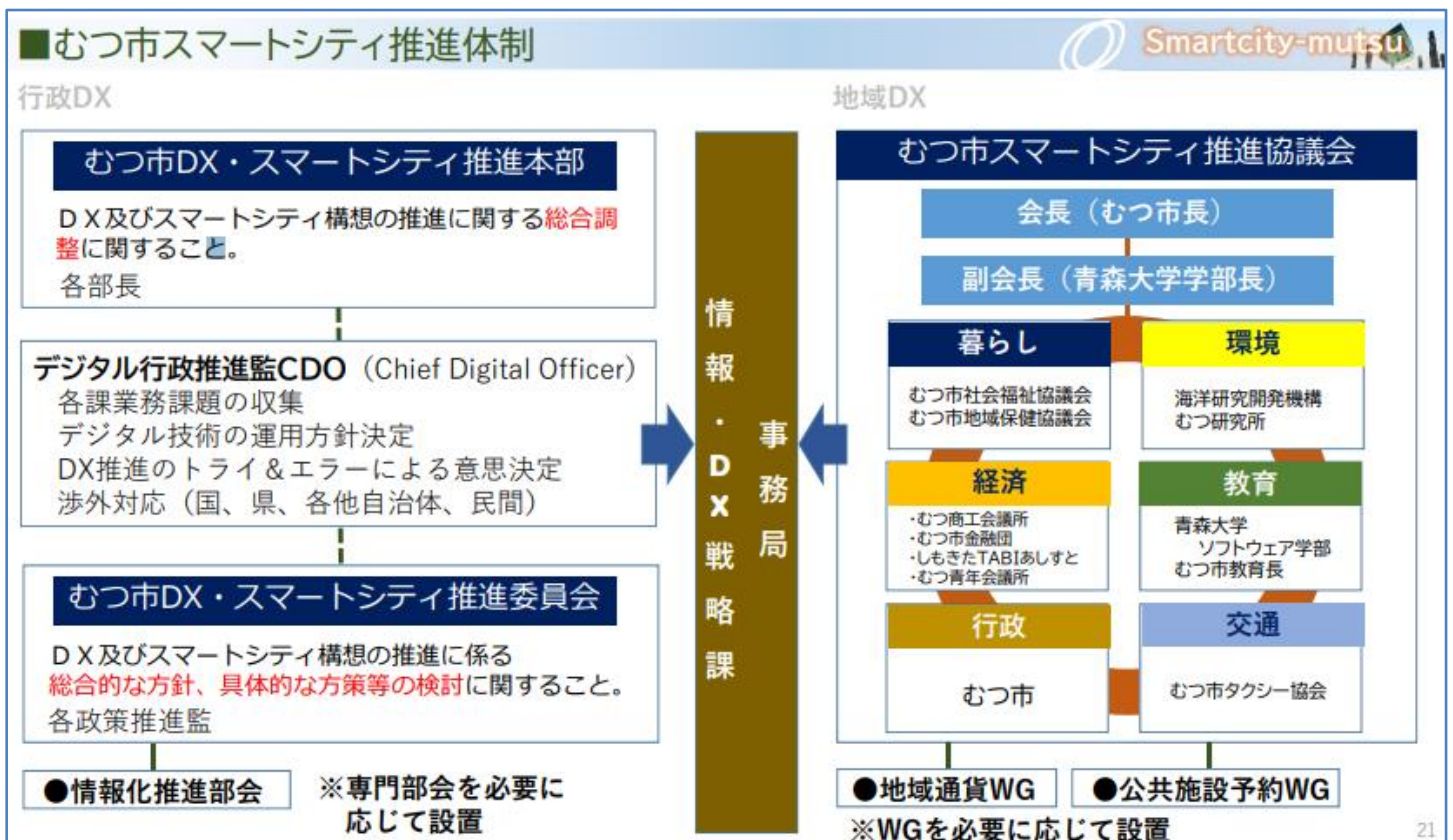
「コンパクトシティ」を標榜して、平成の大合併以来、当むつ市もその道を行ってきたことはみなさんご承知のことと思います。いわゆる都市機能の郊外拡散を抑制し、近距離範囲で効率的な都市機能を充実させるある意味で効率的な都市政策です。しかし一方では遠隔地域では過疎化に一層拍車がかかり、その地域の住民はより不便さを強いられる弱点を含んでいます。

こうしたなか、今度は「スマートシティ」構想が進んでいます。耳慣れない言葉ですが、この構想はデジタル技術を活用して、都市インフラ・施設や運營業務等を最適化し、企業や生活者の利便性・快適性の向上を目指す都市政策です。具体的には「都市内に張り巡らせたセンサー・カメラ、スマートフォン等を通じて環境データ、設備稼働データ・消費者属性・行動データ等の様々なデータを収集・統合してAIで分析し、更に必要に応じて設備・機器などを遠隔制御することで、都市インフラ・施設・運營業

務の最適化、企業や生活者の利便性・快適性向上を目指すものとされています。

むつ市やむつ商工会議所などは2022年7月に地域デジタル通貨の発行やオープンデータ基盤の構築、行政手続きの簡素化を進めるなどして、地域課題の解決を目指すとして当時の宮下市長の肝いりで「むつ市スマートシティ推進協議会」を設立しました。現在はスマートフォンを利用した「市民パスポート」や「高齢者無料乗車証」などマイナンバーカード拡大と結びつけた政策程度ですが、今後は様々なデジタル化への政策が示されると思われます。

しかし、このスマートシティ構想にも様々な問題点が内在しています。具体的には①イニシャルコスト（初期費用）が高い、②セキュリティ上の懸念がある、③システム障害、サイバー攻撃のリスクがある、などです。また、高齢者への配慮などは大きな課題です。そうした意味でもこの政策にも市民目線でキチンと監視する必要があります。



【編集後記】4月は超多忙でした。むつ中間貯蔵施設の稼働スケジュールが発表されて以来、全国の反原発を取り組むグループから原稿やコメント、ZOOM会議参加の依頼が相次ぎました、全国で今、使用済み核燃料の乾式貯蔵施設＝中間貯蔵施設の計画が出されてきたためでしょう、今までは中間貯蔵問題はむつ市固有の課題として扱われる傾向でしたが、喜ぶべきか悲しむべきか…今は5月19日の集会成功へ

向けて頭がクラクラ状態です。果たしてどれ位の参加者があるのか、かつてのような労組の動員も全くありません。この間の一連の集会などに参加されて方へのハガキや郵便でお知らせするだけです。今は集会成功へ向けてインターネット署名やカンパを募っています。ぜひご協力ください。署名やカンパは次のホームページからご確認ください。（栗）

<http://shimokitanokai.g1.xrea.com/>



義経一行は九艘泊の港で船の修復もさることながら、この冬を九艘泊で送らなければならないと判断し、毎日のように山へ出ては木の切り出しなどを行い、どうやら住み家を建てるまでに至った。

義経の住み家は細心の注意を払い、九艘泊より崎をかわした場所にした。そこは現在「トノマ」（殿澗）といわれている。

九艘泊とトノマの山にかけて、毎日筏出しをしていたある日、どうしたことか木の枝に吊るしておいた昼食用の包みが無くなっていた。山中を探し廻ると、大きな木の陰に弱り果てた小猿に一生懸命食べものを与えている親猿を見つけた。みんなはこの日、初めて猿を発見したのである。親猿は真剣なまなざしで子猿を介抱して逃げようとしめない。初めは腹を立て、追い払おうとした人達も哀願するような親猿の姿に次第に哀れを催した。

毎日の作業が終ると、若い者達は夕餉の材料を求め、山菜や時には野兎などを追った。ある日、野兎狩りをして帰ろうとしたが、どうしても一人帰ってこない。みんなで探したが見つからないまま、日が暮れでしまい、仕方ないから明朝また探そうということになった。実は、探していた若者は家に帰っていたのだが、怪我をしていたのだ。若者の話によると兎を追っている間に沢から落ちて足の骨が折れ、動けないでいると、どこから来たのか数匹の猿が現れ、ここまで運んでくれたという。

「猿は恩を忘れなかったのだ」と、みんな感心した。

それからは作業に行くと、必ず数匹の猿の群れが現れた。ある時はキキッと奇声を発して大熊の現れるのを教えたり、強風が吹いて木の下敷きになろうとするのを騒ぎ立てて告げたり、猿はみんなを守ってくれているようであった。

こうして毎日声をかけ合って作業を始めるなど、猿との交流が続いていった。例の子猿も元気に親猿についているのも確認された。

義経はみんなの献身的な作業のおかげで新しい家に住み、日々を送っていたが、ある日の深更、夢の中に白髪の老人が現われた。

「わしはこの山の主じゃ、蝦夷地に渡るにはこの海は難所続きで容易でない。山伝いに北に進めば、蝦夷地の見えるところに出る、そこから渡れば、海の神も守ってくれる」このお告げで一行は山伝いに北へ進むことになり、牛の背に荷物や家を建てる角材をのせて出発することになった。

九艘泊を出て山に出ると、不思議なことに野猿の群が、キャッキャッと一行を迎えるように先になって枝から枝へと飛び歩いた。やがてけもの道とも杣夫道とも知れぬ

道へ出、その道を北へ北へ進んでいるうちに海が見えてきた。海の彼方をよく見ると、はるかに山かげがあつて「あっあれが、夢にまで見た蝦夷地であろう」と元気が出て、疲れも忘れ夢中になって山を下ろうとすると、先がけてきた猿の群が見えなくなっている。

折から、雷鳴と共に豪雨になった。強風が加わり、ものすごい天地雷鳴が起った。アレヨ、アレヨという間もあらばこそ、荷を背にした人も牛も一団となって、滝のように海岸めがけて流れて行く。キャッキャッと、その時どこからともなく猿の声が聞えてきた。弁慶の方へ向って猿のボスが山手を指さしている。

弁慶は猿の群の指している山の方へ登ることにし、再び出伝いに進んだ。日が暮れる頃になって、風も雨もどうやら治まり、ようやく海岸線に出た。ここでも義経一行は、猿のおかげで九死に一生を得たのだった。

菅江真澄は、寛政4年（1792）の10月、松前から半島の奥戸に渡り、佐井、矢越、磯谷あたりを歩いて義経の伝説を訪ねている。

磯谷から南へ行くと、長後、福浦、牛滝などという浦があるが、仏ヶ宇多（仏ヶ浦）というところがあって、その石の形が卒塔婆によく似ている。このあたりの材木石は殊に長く、五尺、七尺にも及んでいる。

源九郎判官義経が、この磯から蝦夷地松前の島へ橋をかけようとして、沢山の材木を牛の背に積ませてこまで来ると、その牛が倒れ伏したので、ここに牛滝という名がつけられた。そしてその材木がみんな石に化けてしまつて、材木石になった、と牛ひきの子どもが語っていたと「牧の冬枯」で書いている。

義経の一行はここを根拠に松前（北海道）へ渡る方途を考え、家来の矢越作左衛門を住まわせたので「矢越」という地名がついたとの事。また近くの「願掛岩」も、義経らが松前に渡れるように願をかけた所といわれる。

現在、願掛岩は男願掛岩と女願掛岩の二つになっている。後の話になるが、願掛岩の中腹に神社を建てるために地ならしをしていたら、八百貫もある大岩があった。これを取り除いてみたら、その下に焚火の跡があり、炭が残っていて、二振りの剣があったという。矢越作左衛門のものか、義経公の剣か判らないが、その時、石器類の武器らしいものも出たので神社に祀ったという記録が古い磯谷の分校に残されていた。

さて、義経一行は潮の流れを利用しなければ蝦夷地へ渡ることが困難とわかり、大間をかわして蛇浦（風間浦村）のグラリ岩を通りぬけ、ハネコ工島（蛇浦海岸）から松前へ渡ったという。ハネコ工島は義経の八艘飛びにちなんでつけられたもので、義経一行が無事松前へ渡るよう祈って、地元の人々が名づけたものとされている。

（森勇氏の「下北伝説の旅」より抜粋）